



桑原武夫集

10

1977

）

1980

岩波書店刊行

桑原武夫集 10

第一〇回配本(全十巻)

一九八一年二月二十五日 発行

定価四〇〇〇円

著者 桑原武夫

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五  
電話 〇三(三六)五(四二)一  
振替 東京六一六三(四〇)

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

© 桑原武夫 1981

## 凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには\*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目 次

凡 例

一九七	懐しい土居先生	2
	三つの挿話	7
	日本のフランス文学研究にのぞむ	13
	紀元二〇〇〇年の挑戦	21
	未見の知己	30
	ヨーロッパの印象	34
	兆民への接近	45
一九七	インディオの山高帽子	74
	中国について	77

年の初めの願いごと	91
宇野久夫『髪形の知性』序にかえて	98
半世紀の思い出	101
別荘	108
ルソーの魅力	112
歴史と人間	117
工業化時代におけるクラフト	121
加藤周一氏をめぐる断片語	140
一九五	
内発的文化的知的創造性について	145
甘くない国際理解を	171
ゼイタクということ	176
八木一夫弔辞	178
虚子についての断片二つ	182

名和君の酒	188
国際ペン大会に参加して	192
「文化力」ということ	197
富士正晴の詩	201
追 憶	208
風俗学とその周辺	212
国際コミュニケーションと日本文化	229
弔カイヨワ	242
朝永さんのこと	245
吉川君のこと	262
文章作法	267
高仙芝について	355
木村さん	372

甲信越と私	375
中国に父をしのぶ	382
着任	384
文字村疎開記	388
自由・平等・友愛と現代世界	406
推薦文	
誠実な文学者	422
私たちの古典	423
或問	424
伝統	426
日本民族の青春	427
実感しうる国民の歴史	428
純粹な芸術家	429
思想を生きた人	430



目 次

『中国詩人選集』	431
座標軸のゆさぶり	432
硬質な自我	433
富士正晴文人画展	434
西洋近代思想の基本線	435
仏像の心とかたち	436
重戦車四台の壮観	436
痛切の美学	437
記念碑的大業績	438
潤達なアカデミズム	439
戦後文学の代表者	440
世界的視野から	441
《全仕事》の意味	442
日本の小説家中里介山	443
全人的な学風と在野精神	445

東亜の俠客	445
温容の大儒	446
人間・南原先生	447
徂徠全集の刊行をよろこぶ	448
巨人的学者の偉業	449
『フランス文学辞典』刊行の辞	450
戦後思想の代表者	452
現代の課題にこたえる	453
博識と想像力	454
司馬遼太郎の歴史小説と現代	456
クリオのめでし人	457
悲劇的な学才	458
自信回復のきっかけに	459
近代文学の本格的研究のために	460
柳田経験をこそ	461

私たちの古典	462
故郷の風光	462
近代化の思想家	463
推薦のことは	465
吉川幸次郎著『音容日に遠し』跋	466
和氏の壁	467
自 跋	469
挿絵目録	481
略年譜	483
著作目録	61
目次索引(五十音順・テーマ別)	41
人名索引	1

1977



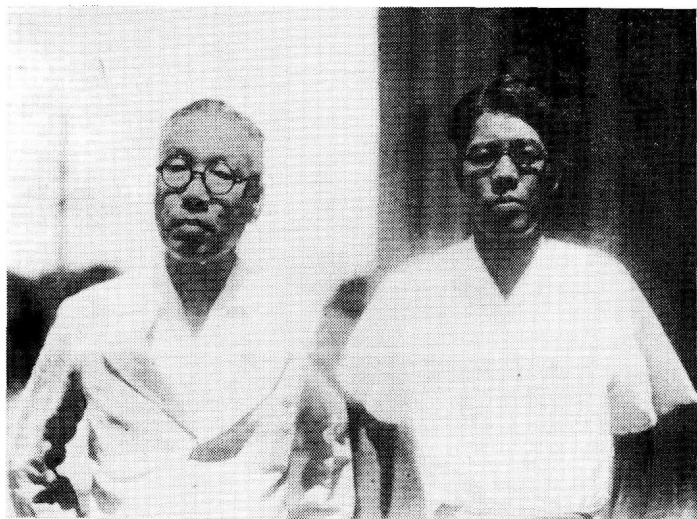
チベットの仏像

## 懐しい土居先生

戦中戦後の五年間を仙台で過ごすことができたのは、私にとって本当に仕合せだったが、幸運の恐らく最大のもは、土居光知先生にめぐり会えたことであつた。東北大学法文学部で、空襲で焼けるまで研究室がお隣りだったほかに、アメリカ占領軍に立派なお宅を接収されてお困りの先生ご夫妻を、近くで少し広かつた拙宅にお迎えして、八ヵ月ばかり同居生活をしたことがあつて、いっそう親しくしていただいたのであつた。

I・A・リチャーズの偉さを教えて下さつたのは先生であつた。『第二芸術』（第二巻所収）は『文学批評の原理』を読まなければ書かれなかつたかも知れない（リチャーズ先生には一九五九年に目にかかつて、チヨゴリザ登山とこの現代俳句批判でお褒めにあずかつた）。繊細な感受性と健康な科学精神、この共存に、土居先生と名著『科学と詩』を書いたリチャーズとの共通点があるように思う。

いつかナンセンス・ポエムのことを話題にされたとき、先生は同じパターン繰返しは快感をあたえるものであり、幼児は特によろこぶといつて、私の記憶は不正確だが、「カエルが石の上から



土居先生と著者(1948年)

水の中へ飛び込んだ、ジャブン。次のカエルが石の上から水の中へ飛び込んだ、ジャブン……」、これを五、六回も繰り返すと、子供はきつと笑いますよ、と言って、そばにいた私の子供に試みられたが、成功だった。それではというので、次の実験が始まった。

「イヌのワン吉が、ワンワンのワンコロリンのワンワンワンと鳴いた。

ネコのニャン吉が、ニャンニャンのニャンコロリンのニャンニャンニャンと鳴いた。」

以下、ネズミのチュウ吉、ブタのブウ吉、ウシのモウ吉、等々とつづくのだが、幼児はキャッキヤと笑うのだった。先生はいつも実験精神が旺盛だった。基礎日本語もそ

の試みの一つと言えよう。

この実験の被験者となった当時三歳になったばかりの私の四女は、特に先生のヒイキだった。彼女は毎朝五時半になると起きてきて、二階の先生の寢室へと階段をのぼって行く。先生はこれを温く臥床に迎え入れて、いつも用意されているマーブル・チョコレート（これは敗戦当時珍らしいものだったが、先生のところにはあった）を数個手に握らせて下さる。幼児はチャッカリしたもので、それが嬉しくて一日も朝の訪問を欠かすことがなかった。今は三子の母となっている彼女のところへ、先生は今もチョコレートに代りに本を時々送って下さるそうだ。

先生は決して多弁ではないが、断続的に簡明にもらされる言葉は確信にみちている、といえば少し言いすぎになるかも知れないが、ためらいや自虐性は皆無である。深い知識と正確な判断を踏まえておられるのだから当然のことかも知れないが、「桑原さん、ちょっと散歩しませんか」と誘われて、私は台の原などの自然の中を歩きながら、賢者との対話ともいうべき楽しい時間をもったことをいつまでも忘れまい。

先生はローレンス、ジョイス、ブレークなど、やや正統的でない、どこか感覚性の強いものを先駆的に日本に紹介されたばかりでなく、古典世界における同性愛についても大変な博学者であることを散歩の間に発見して私は驚いた。断袖の交りなどという中国のことを持ち出してお話を引きのばしたきらいはあるが、先生はうんちくを傾けられ、思想というものは男から男へしか伝わらぬも

のかも知れないね、などと言われた。先生は新しさと感性性につねに敏感だが、それらに淫することは少しもなく、必らず知的につきまとうとされる。恐らく天性の均衡感覚のほかにイギリス風の健全な学風の影響があるのであろう。たとえばフランス近代文学の達成は評価されながらも、その反社会性と退廃は認められない、という態度はいつもはつきり示されるのだった。

先生はガダルカナルで令息を失われたとき、新聞記者に、私は悲しい、と公言して仙台市民を驚かされたが、戦後のユネスコ運動への献身は悲しみに支えられているだけに根強いものである。ユネスコ協会(協力会)運動は日本が世界で先端を切ったのだが、その発祥地は仙台であり、その中心はまがうことなく土居先生なのである。

先生のこれまでに成就された各方面での大きな仕事、それはもちろん不断の努力の結果たること言うまでもないが、それを基本的に支えたものとして比類のない健康ということがあることを、おそばで暮らすうちに私ははつきり知った。フスマ一枚をへだてて二人は机に向っている。そして私は圧倒されるのである。朝九時前から正午まで、先生はじっと坐ったままである。そしてブレークの訳詩が一、二篇でき上っている。気の散りやすい私は一時間以上じっとしていられたことがなかった。

スポーツをぬかして先生を語ることはできない。先生のスキーは軽快流麗というより堅実豪壮のスタイルだった。山歩きのピッチは二十歳ばかり若い私と同じだった。蔵王へお伴したとき山腹の



峨々温泉に泊った。大きな浴室へ入ると、ほかに誰一人いない。泳げますよ、とうながされながらためらっていると、先生はいつの間にか湯の中で平泳ぎから拔手まで、中学生のように嬉戯しておられるのだった。

先生の健康さはその旺盛な食欲に現われている。時おり大きなカレイなどをぶら下げて帰ってくると、私たちと共用だった台所でご自身調理される。私は厨房へは入らないが、家内の観察では中お上手で、そのお姿は楽しげだという。食べものの話もされるが、食通ぶった発言は全く聞かれなかった。敗戦後食糧事情の悪いころ、御一緒に買い出しにも出かけたが、そうしたときでも単に必需品を求めるといふより、利府のナシが食べ頃ですよ、などと言われるのだった。リュックサクに一ぱいつめこんだのを、山越え十余キロの途中で取り出して、かじりながら歩いた味はまた格別だった。

先生は私が存知あげて以来、病氣らしい病氣をされたことがない。だからこそ一層の御自愛を祈りたい。

(一九七七年六月、岩波書店『土居光知著作集』第四卷月報)